News & Scope
Handai Hospital
阪大病院ニュース
第25号
発行／大阪大学医学部附属病院広報委員会（総務課）
http://www.hosp.med.osaka-u.ac.jp

禁転載　（この紙面は再生紙を使っています）

住所／〒565-0871大阪府吹田市山田丘2-15　TEL／06-6879-5021

不妊治療が変わります

生殖医療センターを開設

子どもができないと悩むカップルが増えています。阪大病院では不妊治療だけではなく、妊娠、出産から新生児期のケアまでトータルなサポートを行う生殖医療センターを開設しました。

産婦人科の体外受精室

妊娠から新生児までトータルケア

日本では10組に1組のカップルが不妊といわれています。不妊は女性か男性のどちらかに原因がある場合、男女どちらにも問題があるときがあります。ほとんどのカップルは「子どもができない」と、まず女性が産婦人科を受診します。阪大病院でもこれまで、産婦人科の不妊外来を受診された女性に異常がなければ、男性の精子を調べ、男性に問題があるときには泌尿器科が担当していました。

生殖医療センターは、妊娠、分娩、出産、赤ちゃんのケアなどの不妊治療に産婦人科と泌尿器科だけでなく、小児科、小児外科や遺伝子診療部などが一体となってあたります。

センターでは、できるだけカップルで診察を受けていただくようにします。不妊の原因を知るには、お互いの話をじっくり聞く必要があるからです。

問診や検査で不妊の原因がわかれば、治療です。カウンセリングだけで妊娠することもありますが、人工授精や体外受精をしなければいけないこともあります。体外受精の技術も進んでおり、センターでは最新の技術を導入して、妊娠を可能にするようにします。

阪大病院の泌尿器科は、無精子症の患者さまのこう丸から直接、精子を採取して、体外受精を可能にする技術に関して世界でトップレベルの実績をもっています。

また、体外受精の場合は多胎（双子や三つ子など）になる可能性が高かったりします。どのような場合でも、産婦人科が出産まで継続して、注意深く診察していくことになります。

もし、胎児に異常が認められたときには小児科や小児外科と連携して、治療にあたります。また、遺伝的な問題があるときには、遺伝子診療部がカウンセリングを行います。

将来的には、結婚前に若くしてがんになり、抗がん剤の治療によって精巣や卵巣がダメージを受けるときには、事前に卵子や精細胞を凍結、結婚後に妊娠が可能になるようにする研究も行います。

また、不妊治療は代理母問題など社会的に考えなければならない問題についても法学部や人間科学部などとともに研究していきます。さらに、不妊に関しての相談を受ける不妊カウンセラーの養成も保健学科と連携して行っていく予定です。

木村正・副センター長（産婦人科教授）は「不妊センターではなく、生殖医療センターとしたのは、単に不妊の治療だけでなく、不妊にかかわる生殖の問題をトータルに考えるユニークなセンターとするためです。日本の生殖医療の拠点にしていきたい」と、抱負を語っています。

より高度で安全ながん治療を

化学療法部（腫瘍センター）

地域の拠点病院へ

抗がん剤の調合（薬剤部）

阪大病院では、地域の医療機関におけるがん医療のレベルアップを目指し、より高度で安全ながん治療を行い、新しい治療法の研究開発、一般の人にがんについての理解を深めてもらう情報の発信を行う化学療法部（腫瘍センター）の充実を図っています。

化学療法部（腫瘍センター）は昨年設置され、地域の医療機関におけるがん診療の連携拠点病院として厚生労働省から認められるように、院内のがん診療システムの整備に取り組んでいます。今年度から専任の部長を配置し、機能を強化しています。今年1月には、本院で治療を受けられるがん患者さまについて、がんの種類、治療や予後などを登録する院内がん登録を新たに始めました。大阪府が行っている地域のがん登録への協力体制をより整えたのです。

また、がんの診療を行っている多くの診療科と連携を密にして、より高度で安全ながん治療を行えるようにしていきます。

さらに、地域の人たちに、がんの最新治療法などをよりよく知っていただくために、年3回の「阪大病院　がん診療　市民公開フォーラム」を開催します。第1回は2月3日（土）午後1～4時に大阪大学医学部講義棟A講堂で行います。

入院と同レベルの外来化学療法室

年間5000人以上が利用

化学療法部の外来化学療法室は、2003年12月に開設され入院しているのと同じレベルの抗がん剤治療を外来で受けていただける治療室です。

プライバシーに配慮した外来化学療法室

リクライニングチェアが12台あり、専属の医師と看護師が配置されています。投与される抗がん剤は各診療科の医師の指示に沿って薬剤部で調整されます。薬剤師は、各科のプロトコールに基づいて抗がん剤の投与量をチェックし、安全キャビネットの中で、雑菌やほこりが混入しないように細心の注意を払いながら調剤します。

すべて予約制ですが、抗がん剤治療をされる患者さまが多くなり、予約枠の1日20人を超え、30人近くを治療することもあります。リクライニングチェアで、テレビも付いていますので、治療の間はテレビを見たり、読書をしたり、眠ったり、リラックスできるようになっています。

平成16年度4129人、平成17年度5138人、平成18年度（4－12月）4215人と利用される方が年ごとに増加しています。今後も多くの患者さまに、より安全で快適に抗がん剤治療を受けていただけるように外来化学療法室の充実を図っていく予定です。

「何度も挑戦したけどやめられない」

禁煙外来へどうぞ

わが国において、喫煙による病気の死亡者は年間11万人にものぼるといわれています。さらに、たばこの煙を間接的に吸う受動喫煙による害も明らかになっています。

喫煙はニコチンという薬物に対する依存症、すなわち脳の病気と言っても過言ではありません。禁煙することにより、急にニコチンの摂取量が減るとニコチン切れによる禁断症状を起こすことがあり、これが禁煙を難しくしている大きな原因です。さらに、喫煙が生活の中で習慣化されて生じる、心理的依存と複合しているためます禁煙は困難なのです。

ニコチンパッチを腕などに直接はるだけのニコチン代替療法は、ニコチンパッチによりニコチンを補充しながら、徐々にニコチンの摂取量を減らし、ニコチンのない状態に身体を慣らしながら禁煙に導く療法です。

この療法によって、禁煙が、より確実に、より容易に行えるようになりました。当院では、禁煙外来を予約制で、隔週月曜日に開いています。「何度も禁煙に挑戦したけどやめられない」など、ご自身のみならず周囲の人たちの健康のために、禁煙しようとお考えの方を対象にしています。どうぞご相談下さい。（06－6879－2551）

3科連携でより良い医療

阪大病院には放射線を利用した診断や治療を行う診療科が3科あります。放射線による画像診断を中心に、患者さまの体に負担をかけずに血管奇形や腫瘍などの治療を行う放射線治療科▽放射線を照射することにより、がんなどを治療する放射線治療科▽がんの診断に威力を発揮する陽電子放出断層装置（PET）を中心に放射線による最先端の診断を行う核医学診療科。3科はお互いに協力し合いながら放射線による診断、治療の質と安全の向上に努めています。

放射線科　IVRに注目

CT、MRIなどの画像診断のほか、CTや血管造影で映し出される患部の画像を見ながら細い管（カテーテル）などを駆使して治療をするIVR（インターベンショナル・ラジオロジー）を行っています＝写真。

IVRはカテーテルなどを通す小さな穴を開けるだけですので、患者さまの体には非常に負担の少ない治療法です。腫瘍や血管奇形など全身の幅広い疾患に適応となります。昨年は年間約700件のIVRを行っています。

早期の肝臓がんをラジオ波で破壊するラジオ波凝固療法、肝臓がんの病巣だけに抗がん剤を注入する治療法や静脈瘤や動脈瘤を硬化させる治療法もIVRです。

阪大病院では、手術では治療が難しい動脈と静脈がつながっているなどの先天性の血管奇形に関して、異常な血管に塞栓物質を注入したり、硬化剤を注入したりして治療効果を上げています。顔にできることが多く、美容上の問題からもIVRは傷跡もほとんど残らず、全国から患者さまが治療を受けに来られます。

また、骨粗しょう症、骨腫瘍の転移による痛みを和らげたり、子宮筋腫の治療をするIVRにも取り組んでいます。

放射線治療科　病巣狙い撃ち

がん治療における放射線の役割が重要になっています。

放射線を外から照射して治療する外部照射では、機器の進歩により、病巣に照射する最適な線量（エックス線の強さ）をコンピューターで管理できるようになり、がんの病巣だけをほぼピンポイントで狙えるようになりました。副作用も少なく、大きな治療効果が得られるのです。

外部照射を行う装置として、阪大病院にはリニアックとサイバーナイフⅡがあります。リニアックは体のどの部分にできたがんにも対応できます。エックス線や電子線の強さを変えることによって、体の深部から浅い部分まで自在に適切な線量を病巣に照射でき、効果的な治療が行えます。来年度には最新式のリニアックも導入予定です。

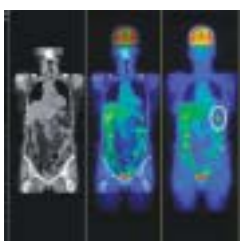
サイバーナイフⅡ

サイバーナイフⅡはロボットを使った定位照射（ピンポイント照射）装置です。対象となるのは脳腫瘍や咽頭がん、口頭がんなど頭頸部にできるがんです。頭部を特製の仮面で固定して照射を行い、患者さまが少し動いても、ロボットが自動的に追尾して照射を行うために、病巣だけを狙い撃ちできるのです。

核医学診療科　PETを駆使

PETは、がんの早期発見に役立つとして、人間ドックなどでもPETがん検診として、取り入れられています。阪大病院では、検診は行っていませんが、がんの早期診断、治療効果の評価や再発の有無を検査するために利用しています。

2002年4月からは脳腫瘍や肺がん、乳がん、大腸がん、どこから発生したのかわからない（原発不明）がんなど13のがんに対して保険が適用されるようになりました。現在では年間1200件ほどのPET検査を行っています。



CT（左）、PET（右）、合成画像（中央）。鮮明に病巣がわかる

PETの処理能力に限界があり、患者さまには検査待ちの期間が長くなり、ご迷惑をおかけしています。

PETによる検査では、がん病巣に集まる放射性医薬品を使うために、原発巣だけでなく、どこにがんが転移しているのかも、つかみやすいという特長があります。新たに診断されたがんについては、がんのある位置、転移の有無が明確になり、外科的な手術ができるのか、化学療法がいいのかなど治療方針を主治医にアドバイスもできます。

PETの画像診断はまだ歴史が浅く、放射線科と協力し合って、CTやMRIの画像と重ね合わせて、より正確に診断する技術の開発も行っています。また、PETに使われる放射線医薬品についても、できるだけがん病巣だけに集まる新薬の開発も進めています。

リハビリテーション部　きめ細やかな作業療法

阪大病院のリハビリテーション部では、患者さまが退院後の日常生活に困らないように身の回り動作や家事動作の支援を行う作業療法にも力を入れています。

リハビリというと、骨折や脳梗塞などの後遺症によって起こる筋力の低下や麻痺した手足を動けるようにする理学療法がまず思い浮かびますが、例えばパーキンソン病などのような神経疾患の患者さまに関しては、手指の細かな動きや入浴の動作など日常生活をうまくできるようにする作業療法がポイントになります。

作業療法は作業療法士が担当します。治療手段の一つとして手指の調和のとれた細かな動きができるようにするために、折り紙などの手芸を行うこともあります。こうした作品作りは機能回復だけではなく、達成感も味わえるために、精神的な効果も大きなものになります。

リハビリテーション部には、日常生活の動作を訓練する和室、風呂、トイレ、キッチンがあり、患者さまが作業療法士の助言のもとで日常の動きを繰り返し練習できるようにしています。

また、作業療法士が患者さまに合わせたスプーンや箸（はし）などの自助具を考案し、食事や着替え、歯磨きなど日常の生活を支障なくこなせるように支援します。

作業療法士の指導で入浴の訓練

ホスピタルミニニュース

終末期患者の在宅療養支援でフォーラム

「終末期患者の在宅療養支援と地域連携」をテーマにした阪大病院フォーラムが昨年11月に開かれました。がんの終末期の患者さまの在宅療養を支援するときの、病院、家族、地域の医療、福祉機関との緊密な連携の大切さが明らかになりました。

今回は、阪大病院に入院していた進行胃がんの患者さまが在宅療養され、自宅で最期を迎えられたことを取り上げました。ご家族にも参加いただき、主治医、看護師、かかりつけ医、訪問看護師らが、それぞれの立場から意見が述べられました。

病院の主治医は在宅療養に向け、かかりつけ医が安全に治療、緩和ケアができるような事前の処置の重要性を指摘しました。看護師は患者さま本人やご家族の在宅療養に移行することに対する本音をいかにつかむかなどコミュニケーションの必要性を強調しました。

コンサートで癒やしのひととき

薬剤師、医師、看護師らの演奏により、秋のミニコンサートが昨年11月10日に行われました。元気になられた入院患者さまのピアノ演奏などもあり、なごやかに秋の夜長を楽しく過ごしました。

クリスマスコンサートは12月22日に開かれ、梅花中・高ハンドベルクワイヤー＝写真＝、Witch Wind Orchestraによるクリスマスソングを中心とした演奏で、入院患者さまたちもクリスマスの雰囲気を楽しんでおられました。また、本学工学部と本院未来医療センターの協力により、Wakamaruくんというロボットが出演者への感謝状を運ぶなど活躍し、会場を沸かせました。

中学生がボランティア体験

吹田市立第6中学の2年生10人がボランティア学習として、昨年11月の3日間、病院ボランティアを体験しました。

病院玄関での案内、病棟での植木の葉っぱふき、お茶配りの準備手伝い、そして実際に車椅子や＝写真＝ストレッチャーで移動を援助する体験をした生徒もいました。ボランティア控室では折り紙などの室内作業を行い、ボランティアさんの丁寧な対応のもと、初めは緊張していた生徒も、次第に生き生きとした表情に変わっていきました。

ホスピタルローソン、スタバ2月オープン

食堂や売店を運営する恵済団では、患者さまや病院関係者から強く望まれていた24時間営業のコンビニエンスストア・ホスピタルローソンを2月1日からオープンします。改装期間中は多大なご迷惑をお掛けしますが、ご辛抱とご理解をお願い致します。

また、ご要望の多かったスターバックスコーヒーショップを現自動販売機コーナーを改装して、2月中旬にオープンします。オープンデッキの設置も計画しています。

セカンドオピニオン外来2年目に

セカンドオピニオン外来は当院の専門医と患者さまが他の病院で受けておられる診療について相談いただく外来です。当院では2005年10月から予約制で開始しました。2006年11月までの受付件数は160件（月平均11件）です。

患者さまやご家族から診療について十分な時間をかけてお話を聞いたうえで、理解と満足いただけるよう説明しています。お問い合わせは保健医療福祉ネットワーク部へ。

外来計算窓口・正面玄関ドアを時間延長

外来患者さまの増加に伴い、診察時間が長引いている現状を考慮して、外来会計計算窓口、料金支払い窓口を午後5時半まで延長しました。なお、時間外の支払いに関しては、これまでどおり午後5時から行っております。また、正面玄関の自動ドアにつきましても午後7時まで開扉することといたしました。